

長谷川望牧師

- *アブラム（アブラハムの元の名）はウルという大都市に住んでいたが、父テラはアブラムと三男の子どもロトとアブラムの妻サライを連れてハランという町に住んだ。そのときアブラムに主の声があった。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。」（創世記12：1）その地はカナン（今のパレスチナ）であった。どの道から、どのようにして行けばよいのか途中で何が起こるのか、その地は住むのに適したところなのか、周りの国々は友好的だろうか等々、不安でいっぱいであったことは想像がつく。しかし、アブラムはただ主の「わたしが示す地へ行きなさい」という言葉に従った。
- *しかし、彼はただ何の根拠もなく従ったわけではない。従えば神の素晴らしい約束があった。「そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」（12：2～3）「大いなる国民になる」とは、子孫が増えて繁栄し、土地も与えられるということ。そして世界のすべての民がアブラハムによって祝福される、アブラムの祝福は神の祝福であるという約束であった。
- *しかし、アブラムは単純に信じることはできなかった。なぜなら、彼の妻サライは不妊の女だったからである。サライが子ども生まなければ祝福のスターさえ切れないのである。しかし、彼はただ「私の示す地へ行きなさい」という主の命令に従って、主を信じて旅立った。そして、カナンの地へ入り、約束通り、大いなる祝福を受けたのである。そのアブラハムの信仰についてパウロは述べている。「彼は望みえないときに望みを抱いて信じ、あなたの子孫は、このようになる」と言われていたとおり、多くの国民の父になりました。」（ローマ4：18）
- *筆者も神学校を出るとき、あなたの遣わされるところどこへでも参ります、というアブラムの心境であった。最初の古川からこの地古河へ、そしてこの度これから人間へと、すべて私にとっては全く未知の地であった。しかし、主の御声に従って歩いていくとき、主はすべてを守り、必ず祝福を下されると信じている。その祝福は子孫が増えること、すなわちイエス・キリストを信じる「神の子ども」を多く与えてくださるということであると思う。
- *私たちの地上の人生も、どこへ、どのように行くのか先はわからない。途中で様々なことに出会う。しかし、最後に向かうところは天の御国である。故郷目指して希望をもって歩いていきたい。